sukhāvatī vyūhaḥ ||

易安という近圏府そのものとしてはいませるきわの

すなわち 実態一身

namaḥ sarva-jñāya ||

命数そのことが、

誰もかれもらの直截これなるにたるきわにともおかせる御方

のためとこそはいよかし！

evaṃ mayā śrutam | ekasmin samaye bhagavān śrāvastyāṃ viharati sma |

このように、私自身によってでもつかまつろうばかりとてはありもうさねばならなかったところが、これまた、嘉聞なっていることがらにこそなければなりませぬ。

かたじけなくも、歴然者こそが、 きこえほまれのもり 幕下に於て、また、ご遊適あそばすのであった。

jeta-vane ʼnāthapiṇḍa-dasyārāme mahatā bhikṣu-saṃghena sārdham |

親征殿下による野営に於ては、すなわち、非有司たりけらし旅団らの信託なるにたりませる卿公ご一身のならまほしけれともありけるばかりにはあったところの、これ、嘗餐そのことに於てでもかたじけのうわたらさねばならぬばかりにはあったところでもありましたが、絶大たりけらしとはおわせるきわの、これまた、志節者らという社会ご自身によられましてでも、それ、等親にまかりあらりょうばかりとこそおかせられたのでなければならぬ。

ardha-trayodaśabhir bhikṣu-śatair abhi=jñātābhijñātaiḥ sthavirair mahā-śrāvak=aiḥ sarvair arhadbhiḥ | tad yayhā sthavireṇa ca śāri-putreṇa |

また、諸々の、一半支なりけらし者らが十三科たるべくはおらんきわにともいるおおみものごとども、すなわち、諸々の、節介能らが百箇なりけりとはあったところとてあるおおみことがらどもによっては、これまた、諸々の、啓上せられてある者らの啓暁なっている仁者たち一身らによっても、これ、かたじけのうくだしおかせんほどにとはわたらせたまうのでもあったが、また、重鎮たりけらしとはおらんものごとどものことにもいましょうところの、諸々の、博大なる嘉名者がたによってでは、諸々の、なにもかもども、すなわち、諸々の、慰恩者がたご一身らによってもまかりおかせんほどにとはあそばせるのでもあった。

当然、重厚たらまほしとはおろうおおみことがらとしてもわたらせんきわのではあるけれども、これまた、乗輿后体が嗣嫡なりけらしとはおわさん御方によってでもかたじけのうおかれんばかりにあらせられましょうところではあることにもなる。

mahā-maudgalyāyanena ca mahā-kāśyapena ca mahā-kapphiṇena ca

また、これ、甚大たる同莢性という来歴能ご自身によってであずかりあそばるるわけではあるけれども。すなわち、宏大なる元亀ご一身によってこそ・これまた、絶大たる宿痰ご自身によって・ではあるけれどもである。

mahā-kātyāyanena ca mahā-kauṣṭhilena ca revatena ca

また、博大なる幾何性という将経霊ご一身によって、これ、あずかりおわしませるわけではあるけれども。すなわち、甚大たる体腔ご自身こそによって・これまた、艶姿ご一身によって・ではあるけれどもである。

śuddhi-panthakena ca nandena cānandena ca

また、これ、潔済性という直径能ご自身によってであずかりあらるるわけではあるけれども。すなわち、好意ご一身によってこそ・これまた、善意ご自身によって・ではあるけれどもである。

rāhulena ca gavāṃ patinā ca bharad-vājena ca

また、暗裡能ご一身によって、これ、あずかりあそばせるわけではあるけれども。すなわち、諸々の、器宇たち自身のなるべかれとはいましょうところの、適性ご一身によってこそ・これまた、担荷なりつつある駿足ご自身によって・ ではあるけれどもである。

kālodayinā ca vakkulena cāniruddhena ca |

また、時運という出歴能ご一身によって、これ、あずかりおわしませるわけではあるけれども。すなわち、酔客ご自身こそによって・これまた、内塞せずにいませる御方によって・ではあるけれどもである。

etaiś cānyaiś ca saṃbahulair mahā-śrāvakaiḥ saṃbahulaiś ca bodhi-sat=tvair mahā-sattvaiḥ | tad yathā mañju-śriyā ca kumāra-bhūtena |

それはともかく、また、他端にとはこれまかりおらんほどにもおるであろうきわのではあるけれども、諸々の、雑然裡たりけらしとはおろうおおみものごとども、すなわち、諸々の、宏大なる嘉聞能がたご一身らによっても、 これまた、 複雑裡たらまほしとはおろうおおみことがらどものことにもあられるであろうはずのではあるけれども、また、諸々の、覚然体が存誠能なりけらしとはあそばれん御方がた、 すなわち、 諸々の、絶大たる位本霊がたご自身によってでもおわしましょうところではあった。

当然、閑雅嫡適能ご一身としてもかたじけのうせんほどにとあらせたまうきわのではあるけれども、童貞が立存なってはあそばせる御方によってまかりおかせられますきわにとおわしたのでもあることにはなる。

ajitena ca bodhi-sattvena gandha-has=tinā ca bodhi-sattvena

これまた、長優せずにいる者のことにもあられますはずのではあるけれども、知性という切誠魏ご自身によってでは、幽気という優象霊一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、また、これ、自覚体が紀本魂なりけらしとはおわさん御方によってであらせられますところでもあった。

nityodyuktena ca bodhi-sattvenāniks=
ipta-dhurena ca bodhi-sattvena |

すなわち、平常たりけらしものごとどもが発効なってはいることがらのことにもおかれるはずのではあるけれども、理性という存誠能ご自身によってでは、これまた、自重の成算せずにいる仁者一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、これ、覚然体が位本霊なりけらしとはおわさん御方によってであらせられますところでもあった。

etaiś cānyaiś ca saṃbahulair bodhi-
sattvair mahā-sattvaiḥ |

それはともかく、また、これ、他故とてはまかりありけるばかりともあらねばならなかったところのではあるけれども、混然裡たりけらしとはおろうきわにともおらん者たち、すなわち、諸々の、知性という切誠魏がたご自身によってでは、これまた、諸々の、博大なる紀本魂がたご一身らによってあそばせたまうばかりにとこそおわしたのでなければならぬ。

śakreṇa ca devānām indreṇa brahmaṇā
ca sahāṃ-patinā |

また、全能者ご自身のこととてもあられねばならぬところのではあるけれども、すなわち、諸々の、精神たち一身らのたるべくこれわたらしょうきわにとなければならぬばかりの、官能ご自身によってでは、これまた、霊格ご一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、また、寛恕権性ご自身こそによってではおわしましたところでもなければあらぬ。

etaiś cānyaiś ca saṃbahulair deva-
putra-nayuta-śata-sahasraiḥ ||1||

それはともかく、すなわち、外端にとはこれつこうまつらんほどにもいるばかりのではあるけれども、 これまた、 芒混裡なりけらしとはあらんものごとどもによってでも、また、諸神性という正嫡らの個結なりもうしてはいるわけでもない百元が千支たらまほしとはおろうことがらどもによってこれおかせられましょうきわにともあらせたもうた。

<—>

tatra khalu bhagavān āyuṣmantaṃ śāri-putram āmantrayati sma |

かたや、そのつど、欣然者におかせられましては、命全者、すなわち、輿台が繼嗣なりけらしともあそばれん御方に対して、ご垂範これたまわすのであった。

asti śāri-putra paścime dig-bhāge ito buddha-kṣetraṃ koṭi-śata-sahasraṃ bud=dha-kṣetrāṇām atikramya sukhāvatī nāma loka-dhātuḥ |

「乗輿后体が嗣嫡たる方よ、予後ならまほしけれとはまかりあろうばかりの、諸方今感という分位一身に於て、これまた、経済なっている者が、また、本田の覚然なっている仁事、 すなわち、 錯密体という百科どもが千箇たらまほしともおろう者に取って・ 諸々の、英覚者らという田野そのことどものなるべきはずと・ こそではありますが、これまた、越度なれるや、また、安閑という近習府、すなわち、名位そのことのことでもあるところの、俗塵という理脈自身が、これまた、有るのであります。

tatrāmitāyur nāma tathāgato 'rhan samyak-saṃbuddha etarhi tiṣṭhati dhr=iyate yāpayati dharmaṃ ca deśayati |

そのつど、命分の裁量せずにいる仁事そのこととしてはかたじけのうわたらせんほどにともおわしませるが、 また、 名分そのことのこととてはまかりおかれんばかりともあられましょうところの、来同者ご一身、すなわち、恩慰ならせつつはいませるばかりの、これまた、正格悔悟者も、 やはり、 自立あそばされ、領喩せられたまい、

運命せしめくだしおかせられ、 また、 法理そのことをしてではありまするけれども、すなわち、趣向せしめたまわすのであります。

tat kiṃ manyase śāri-putra kena kāraṇena sā loka-dhātuḥ sukhāvatīty ucyate |

さようなものごとが、 これまた、何ごとにと、ご認許できたまわれるや。 輿台が正嫡たる方よ。誰としてはおらねばならなかったきわの、験功によってか、さような世塵が素脈ならざるべからざりける場も、また、適悠という近圏府そのもののことであるところでなければならぬ。というふうに、勘弁せられるのでありましょうや。

tatra khalu punaḥ śāri-putra sukhāv=atyāṃ loka-dhātau nāsti sattvānāṃ kāya-duḥkhaṃ na citta-duḥkham apram=āṇāny eva sukha-kāraṇāni |

ところで、こなた、そのつど、 乗輿后体が継嗣たる方よ、 悠閑という近習府そのものとしてはおったばかりともいるきわの、 すなわち、 俗世という脈理自身に於て、これまた、諸々の、存誠能たち一身らのならまほしと、また、体質が憂苦たりけらしものごとが、無いのであります。すなわち、諸心知という苦困のことではなく、これまた、未直観どもそのこととしてでもおらねばならぬにはほかならぬはずでもあるのが、また、諸々の、易安による作用そのことどもになければなりますまい。

tena kāraṇena sā loka-dhātuḥ sukhāv=atīty ucyate ||2||

すなわち、さような、因用のことにあらざるべからざりけることがらによってではあらねばなりませぬが、これまた、さような俗塵が理脈ならざるべからざりける廷も、また、安閑という近圏府そのものとしておろうはずでなければならぬ。というふうに、理弁されはするのでもあります。」 <二>

punar aparaṃ śāri-putra sukhāvatī loka-dhātuḥ saptabhir vedikābhiḥ sap=tabhis tāla-paṅktibhiḥ kiṅkiṇī-jālaiś ca samalaṃkṛtā

「ところが、更に、 輿台が嗣嫡たる方よ、 すなわち、適悠という近習府そのものが、これ、世塵という素脈自身のこととてはあらねばならなかったところでもありますが、これまた、七元どもそのこととしてではおろうはずともおらんばかりの、また、直感せしめうるにたるままならまほしとはあろう砌のことでもあるところの、七支そのことども、すなわち、諸々の、指掌という五冪性どもそのものによってでは、これまた、諸々の、累信后体という網膜どもそのことによってでもまかりあらんばかりとではありまするけれども、また、均整なっているきわにおるのでなければなりませぬ。

samanta-to ऽnuparikṣiptā citrā darś=anīyā caturṇāṃ ratnānām | tad yathā su-varṇasya rūpyasya vaiḍūryasya sphaṭi-kasya |

すなわち、至近の上からは、これまた、位次なっているきわにとおらん場としてもおらねばならぬばかりの、塗沢圏そのものが、直視せられるを要するべかれとはあろうばかりにもおるではありましょうが、また、諸々の、四科そのことども、すなわち、諸々の、恩恵どもそのことのたらまほしとつこうまつろうばかりにおるはずでなければなりませぬ。当然、高次ならまほし相貌一身のたりけらしともおるが、本象性そのことのならまほしとはおり、これまた、礫石性そのことのたりしともおるが、精晶体のままなりとてはある者のたりけりともおったことにはなるはずであります。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-guṇa-vyūhaiḥ samalaṃkṛtaṃ tad buddha-kṣetram ||3||

こういうふうにこそ、 諸々の、形象そのことどもによっても、また、 乗輿后体が正嫡なる方よ、諸々の、自覚せられてある本邑が性情たりけらし特態たち自身によってでは、 すなわち、 整斉せられてあるところとてもまかりあらねばならなかったば

かりとはあるところが、さような覚在能という邑邦のことにあらざるべからざりけるものごとでなければなりませぬ。」 <三>

punar aparaṃ śāri-putra sukāvat【ī】 loka-dhātau sapta-ratna-mayyaḥ puṣkar= iṇyaḥ tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaiḍūryasya sphaṭkasya lohitamuktasy= āśmagarbhasya musāragaivasya saptam= asya ratnasya |

「ところで、更に、 輿台が繼嗣なる方よ、 これまた、悠閑という近圏府そのものも、また、俗世という脈理一身に於ては、すなわち、七箇による恵施どもの練成これなるにたるべくもおらねばならぬきわの、これまた、潤沃后体そのものの方からあずかりおろうはずでこそなければなりませぬ。当然、黄金調たりけらしことがらのなりけりとはあったはずでもあるが、また、白銀精たらまほし者のなるべかれとはあったばかりでもあり、瑠璃質たりけらしものごとのなりきとはあろうはずであるが、すなわち、水晶製たらまほしことがらのなりとてもあり、珊瑚調たりけらし者のなるべかれとはあろうはずであるが、これまた、馬脳精たらまほしものごとのなるべからんともあり、琥珀質たりけらしことがらのなるべきとはあるであろうはずでもあるが、また、第七次元下そのこと、 すなわち、 恩給そのことのたるべけんともおろうばかりにはいることにもなります。

aṣṭāṅgopeta-vāri-paripūrṇāḥ samatīrtha-kāḥ kāka-peyā su-varṇa-vālukā-saṃstṛtāḥ |

これまた、八元という諸成素の祐助しておる水利が充全なってはいるきわならまほしともあろうばかりにして、等価たりけらし者らが津梁なるべきままたらまほしとはおったばかりともあり、烏合霊らにより濡需せられざるをえぬところにはつこうまつらんばかりとてもあり、また、高次ならまほしものごとどもが様相たるべき諸堆沙洲

tāsu ca puṣkariṇīṣu samantāc catur-diśaṃ catvāri sopānāni citrāṇi darś=anīyāni caturṇāṃ ratnānām tad yathā su-varṇasya rūpyasya vaiḍūryasya sphaṭi-kasya |

すなわち、さような、諸々の、沃沢后体としておらざるべからざりける廷どもに於てではありまするけれども、これまた、近際自身こその方からは、四支という方計対そのものに対しても、また、諸々の、四科どもそのこと、すなわち、諸々の、半額そのことどものことにはあろうはずの、諸々の、光沢どもそのことも、これまた、凝視されるを要すべからんとあるわけであり、また、四箇そのことども、すなわち、諸々の、給施どもそのことのたりしとはおろうはずにもなければありませぬ。当然、高度なりけらし色調一身のたるべしとはおるが、本色性そのことのなりとてもあり、これまた、薬石性そのことのたりしとはおるが、結晶体のままなりとてもあることがらのたりけりとはおったことにもなるはずであります。

tāsāṃ ca puṣkariṇīnāṃ samantād ratna-vṛkṣā jātāś citrā darśanīyāḥ saptānāṃ ratnānām tad yathā suvarṇasya rūpy=asya vaiḍūryasya sphaṭikasya lohita=muktasyāśmagarbhasya musāragalvasya saptamasya ratnasya |

また、さような、諸々の、潤沃后体としておらざるべからざりける砌どものならまほしとこそではありまするけれども、すなわち、至辺自身の方からは、これまた、諸々の、恩恵という主幹たち一身らも、また、得生なっているきわにとはおるのでもあります。すなわち、当塗権そのものこそが、これまた、直視せられるを要するべかれとあるわけですが、また、七元そのことども、すなわち、諸々の、恵施どもそのことのたらまほしとはおろうばかりにもなければありませぬ。当然、純金製なりけらし者のたるべきはずとはおるであろうが、これまた、純銀調ならまほしものごとのたるべけんともおり、瑠璃精なりけらしことがらのたるべくはおろうはずでもあるが、また、水晶質ならまほし者のたるにとはおろうばかりにもあり、珊瑚製なりけらしもの

ごとのたりけれとはおったはずであるが、すなわち、馬脳調ならまほしことがらのたりしともおり、これまた、琥珀精なりけらし者のたりけりとはおったはずでもあるが、また、第七次元下そのこと、すなわち、恩給そのことのなりけりとはあったことにもなります。

tāsu ca puṣkariṇīṣu santi padmāni jātāni nīlāni nīla-varṇāni nīla-nirbhāsāni nīla-nidarśanāni | pītāni pīta-varṇāni pīta-nirbhāsāni pīta-nidarśanāni | lohitāni lohita-varṇāni lohita-nirbhāsāni lohita-nidarśanāni | avadātāni avadāta-varṇāni avadāta-nirbhāsāni avadāta-nidarśanāni | cit=rāni citra-varṇāni citra-nirbhāsāni citr【ā】-nidarśanāni śakaṭa-cakra-pramāṇa-pariṇāhāni |

これまた、さような、諸々の、沃沢后体のことにあらざるべからざりける場どもにこそ於てではありまするけれども、諸々の、座標そのことどもが、生得せられてあるものごとどもに取りて、また、有るのであります。

すなわち、諸々の、青たりけらしことがらどもは、青色が顕色なりけりともあらねばならなかったばかりではあるが、これまた、諸々の、青たらまほし者らが象徴なりけらしものごとどもに対しても、また、諸々の、青色による徴験どもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

諸々の、黄たりけらしことがらどもは、すなわち、黄色が相貌なりけりともあらねばならなかったばかりではあるが、これまた、諸々の、黄たらまほし者らが印象なりけらしものごとどもに取りても、また、諸々の、黄色による照顧そのことどものことにこそあろうはずでなければなりませぬ。

すなわち、諸々の、赤たりけらしことがらどもは、赤色が様相なりけりともあらねばならなかったばかりではあるが、これまた、諸々の、赤たらまほし者らが象形なり

けらしものごとどもに対しても、また、諸々の、赤色による徴証どもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

諸々の、粋浄なっていることがらどもは、すなわち、原色が色調たりけらしともおらねばならぬばかりにはいるが、これまた、諸々の、採粋せられてある者らが表象なりけらしものごとどもに取りても、また、諸々の、純色による照映そのことどものことにこそあろうはずでなければなりませぬ。

すなわち、諸々の、鮮彩たりけらしことがらどもは、色沢が顕色なりけりともあらねばならなかったばかりとてはあるが、これまた、諸々の、濃彩たらまほし者らが象徴なりけらしものごとどもに対しても、また、諸々の、塗抹態による徴験どもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

すなわち、車台という本陣による直観が幅員たるべけれとはつこうまつらんほどにともいるきわにこそなければありませぬ。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣtra-guṇa-vyūhaiḥ samalaṃkṛtaṃ tad buddha-kṣetram ||4||

このように、諸々の、型色そのことどもによっては、乗輿后体が嗣嫡なる方よ、これまた、諸々の、覚現せられておる本田が性質たりけらし当態たち自身によってでも、また、調整せられておるきわにとはまかりおらねばならなかったばかりにもいるのが、すなわち、さような才覚者らという田野のことにあらざるべからざりけることがらでなければなりませぬ。」 <四>

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-kṣetre nitya-pravāditāni divyāni tūryāni | su-varṇa-varṇā ca mahā-pṛthivī ramaṇīyā |

「ところが、更に、輿台が正嫡なる方よ、そのつど、本邑が理覚されてある仁事そのことに於てでは、尋常たらまほし者らが通喩してもいるきわにとはおらねばならぬものごとども、すなわち、諸々の、潔然性そのことどもが、諸々の、和韻性どもそのことに取ってつこうまつらんばかりとてあるところでなければなりませぬ。これまた、

高度なる相貌が様相たりけりともおったばかりのではありまするけれども、また、甚大ならまほし地平原そのものが、すなわち、安堵せられるを要するべけれとはまかりあろうほどにもおりましょうが。

tatra ca buddha-kṣetre triṣkṛtvo rātrau triṣkṛtvo divasasya puṣpa-varṣaṃ pravarṣati divyānāṃ māndār=ava-puṣpāṇām |

これまた、そのつどではありまするけれども、覚存能という邑邦そのことに於ては、再三。 また、客夜来そのものに於ても、両三度。 すなわち、白日ご一身のたるべしとはおらんきわの、 英華という雨雪そのことが、滴露するのであります。 これまた、高潔ならまほしけれともあろうばかりの、諸々の、鈍鳴花らという精華そのことどものたりけらしとはつこうまつらんほどにもおるではありましょうが。

tatra ye sattvā upapannās te ekena puro bhaktena koṭi-śata-sahasraṃ buddhānāṃ vandanti anyāṃl loka-dhātūn gatvā |

そのつど、およそ、諸々の、位本霊らとしておらざるべからざりけむ者たちも、また、賛佑これもうしてはいるきわにともおりましょうが、彼ら自身は、すなわち、一支そのことによって、 これまた、先予に・ また、分掌なっていることがらによって、すなわち、 稠密体という百科どもが千箇なりけらしともあらん者に対し・ これまた、諸々の、覚然なっているおおみものごとどものたるべく、述賛なりもうすのであります。これ、外故とてはまかりあったばかりともあろうところの、また、諸々の、俗塵という理脈たち一身らに取り、疏通なってこそであるわけですが。

ekaikaṃ ca tathāgataṃ koṭi-śata-sahasrābhiḥ puṣpa-vṛṣṭibhir abhy=avakīrya punar api tām eva loka-dhātum āgacchanti divā vihārāya |

すなわち、一元一支にとこそではありまするけれども、 これまた、 同塵能ご自身に対して、 また、 錯密体という百科が千箇なりけりとてはあったところの、諸々の、栄華という潤注性どもそのものによって、潅沃もうしあげたるのち、ことさらに、さような、まさしく、廷そのもの、すなわち、世塵という素脈ご一身に取ってこそ、これまた、曾来なりもうすのであります。 また、 白昼、これ、閑客ご自身のおんためとてもつこうまつらんばかりとはあらんところでもあります。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-guṇa-vyūhaiḥ samalaṃkṛtaṃ tad buddha-kṣetram ||5||

こういうふうにこそ、諸々の、肖像そのことどもによっては、乗輿后体が綱嗣たる方よ、 すなわち、 諸々の、英覚者らという本田が性能なりけらし個態たち一身らによっても、これまた、整理されてあるところとてはまかりあらねばならなかったばかりともあるところが、さような田野が自覚せられてある仁事のことにあらざるべからざりけることがらでなければなりませぬ。」 〈五〉

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-kṣetre santi haṃsāḥ krauṃcā mayūrāś ca |

「ところで、更に、 輿台が嗣嫡たる方よ、 また、そのつど、覚在能という本邑そのことに於てでは、諸々の、客雁霊たち自身が、すなわち、諸々の、仙鶴霊たち一身らとして、これまた、有るのであります。 また、 諸々の、神鳳霊たち自身のことでもあったところではありまするけれども。

te triṣkṛtvo rātrau triṣkṛtvo divas=asya saṃnipatya saṃgītiṃ kurvanti sma kha-ka-kha-kāni ca rutāni pravyāh=aranti | teṣāṃ pravyāharatām indriya-bala-bodhy-aṅga-śabdo niścarati |

さような者たち一身らは、 すなわち、再三。 これまた、宵夜半そのものに於ても、また、両三度。すなわち、これ、白日ご自身のなるべかれとてつこうまつらんばかりに、寓現なるや、曲戯性そのものに対し、自験なりもうすのではありましたが、これまた、空隙のままたりける者らが閑暇なりしままとてもあろうおおみものごとどもに取ってではありまするけれども、また、諸々の、鳴響なっているおおみことがらどもがこそ、すなわち、踏韻もうすのであり、さような者たち一身らのたるべけんと、これまた、韻致せしめられてある砌に対し、また、諸能官性が気力なりけらし諸自覚体が本支たるべき語調自身が、准演これなるのであります。

tatra teṣāṃ manuṣyāṇāṃ taṃ śabdaṃ śrutvā buddha-manasikāra utpadyate dharma-manasikāra utpadyate saṃgha-manasikāra utpadyate |

そのつど、さような、諸々の、人徳能らとしておらざるべからざりけるおおみものごとどものなるべからんとて、すなわち、さような語感のことにおわさざるべからざりける御方に取り、嘉聞なりもうしてや、 これまた、 心理の覚現せられておる仁者一身が、また、位出できるのであります。すなわち、諸理法が心性たりけらし御方にあっては、これまた、出処せられこそおかれますわけであり、また、倫社という心情自身としてでも、すなわち、支出できは、これ、わたらしょうはずでもあります。

tat kiṃ manyase śāri-putra tiryag-yoni-gatās te sattvāḥ na punar evaṃ draṣṭavyam |

さようなことがらを、 これまた、何ごとにと、自認せられおかるや。 乗輿后体が正嫡なる方よ。諸生霊が懐孕体たりし者らの疎通なっているきわにとはおらねばならぬばかりにもおらんのが、また、さような、諸々の、切誠魄らのことにあらざるべからざりける者たちでなければなりますまい。さりながら、このようにつこうまつらんほどにとはおらねばならなかったのも、 すなわち、 凝視されねばならぬものごとでなければなりませぬ。

tat kasmād dhetoḥ nāmāpi śāri-putra tatra buddha-kṣetre nirayāṇāṃ nāsti tiryag-yonīnāṃ yama-lokasya nāsti |

さようなことがらそのことが、誰としてはおらんきわの、所以の方からこれおるのでもありましょうや。これまた、名目そのことがであるわけでこそはあっても、輿台が継嗣なる方よ、そのつど、才覚者らという邑邦そのことに於ては、諸々の、囚役たちのたらまほしかれと、実在しもせず、また、諸々の、禽獣という孕性たち一身らのなるべきはずとて、すなわち、死線という俗世自身のたらまほしかれと、自存これありようがないのであります。

te punaḥ pakṣi-saṃghās tenāmitāyuṣā tathāgatena nirmitā dharma-śabdaṃ niścārayanti |

ところが、さような、諸々の、翼然ならまほしける社団のことにあらざるべからざりける者たちは、さような寿命が計量せられずにある仁事としておらざるべからざりけるおおみものごとのことにもあられたまうところの、征合者ご一身によっては、これまた、推度なっているきわにともおり、理気という語勢自身をして、また、准展せしめるのであります。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-guṇa-vyūhaiḥ samalaṃkṛtaṃ tad buddha-kṣetram ||6||

こういうふうにこそ、諸々の、式彩どもそのことによってでは、乗輿后体が嗣嫡たる方よ、すなわち、諸々の、理覚されてある本田が性度なりけらし実態たち一身らによっても、これまた、均整なっておるきわにとはまかりおらねばならんほどにもいるのが、さような覚存能という田野としておらざるべからざりけることがらになければなりませぬ。」 <六>

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-

kṣetre tāsāṃ ca tāla-paṅktīnāṃ teṣāṃ ca kiṅkiṇī-jālānāṃ vāteritānāṃ valgur mano-jaḥ śabdo niścarati |

「ところで、更に、 輿台が正嫡たる方よ、 また、そのつど、本邑の覚然なっている仁事そのことに於ては、 すなわち、 さような、諸々の、指標らという五遞性どものことにあらざるべからざりける場どもとしてもおらねばならなかったきわのではありまするけれども、 これまた、 さような、諸々の、倍遞后体という網絡どものことにあらざるべからざりける者たちのなりけりとあったところでなければならぬばかりのではありまするけれども、 また、 諸々の、煽揚しておるものごとどもの催吹なっている仁事どもそのことのたらまほしとこそ、すなわち、絶妙にとはこれつこうまつらんほどにもいるが、これまた、諸心象の得生なるにたるべくはおらんきわにもいるではあろうばかりの、語義自身が、また、出演これあるのであります。

tad yathāpi nāma śāri-putra koṭi-śata-sahasrāṅgi-kasya divyasya tūryasya cāryaiḥ saṃpravāditasya valgur mano-jaḥ śabdo niścarati |

当然、のみならず、 乗輿后体が継嗣なる方よ、 稠密体が百元たりける千支どもが本全なりきままたるにともおらんきわにはこれおりましょうばかりの、すなわち、廉直性そのことのならまほしともあらねばならぬところとてはあるが、これまた、和声性そのことのたらまほしとおるのでなければならぬはずの、 また、 諸々の、品行性そのことどもによって、すなわち、韻訓せしめられてあるおおみことがらのなるべからんとこそ、これ、絶佳とてまかりあったばかりともあるが、これまた、心緒が生得はたすにたるべくはおらんきわの、語調一身も、また、准演なりもうしはすることにもなります。

evam eva śāri-putra tāsāṃ ca tāla-paṅktīnāṃ teṣāṃ ca kiṅkiṇī-jālānāṃ vāteritānāṃ valgur mano-jaḥ śabdo niścarati |

このようにであったにはほかならぬところでもありますが、 輿台が嗣嫡たる方よ、すなわち、 さような、諸々の、 指掌という五冪性としておらざるべからざりける廷どものことにはあらねばならなかったはずでもあるところのではありまするけれども、これまた、さような、諸々の、累信后体という網膜どもとしておらざるべからざりける者たちのなりけりとあったところでなければならぬはずのではありまするけれども、また、諸々の、扇揚せられてあるものごとどもが吹扇せられてある仁事どもそのことのたらまほしとこそ、 すなわち、 絶妙にとはこれつこうまつらんほどにもいるではあろうが、これまた、諸心境の得生あるにたるべくもおらんきわの、語感自身が、また、出演ありもうすのであります。

tatra teṣāṃ manuṣyāṇāṃ taṃ śabdaṃ śrutvā buddhānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭh=ati dharmānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhati saṃghānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhati |

そのつど、 すなわち、 さような、諸々の、人表霊らのことにあらざるべからざりけるおおみことがらどものなるべからんとこそではありますが、これまた、さような語勢としておわせざるべからざりける御方にと、聞便はたしてのちに、また、英覚者らという追憶性そのものが、すなわち、体位一身に於て、同位これなるのであり、これまた、憲法という随想性そのものも、また、体調自身に於て、並位これあるわけであります。すなわち、講社という追懐性そのものこそが、これまた、体格一身に於て、また、同位なりもうすのであります。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-guṇa-vyūhaiḥ samalaṃkṛtaṃ tad buddha-kṣetram ||7||

こういうふうにこそ、諸々の、形象そのことどもによっては、乗輿后体が正嫡たる方よ、 すなわち、 諸々の、自覚せられてある邑邦が性情なりけらし特態たち自身によってでも、これまた、整斉せられてあるところとてはまかりあらねばならなかったばかりにもあるところが、さような覚在能という本田のことにあらざるべからざりけるものごとでなければなりませぬ。」 <七>

tat kiṃ manyase śāri-putra kena kāraṇena sa tathāgato 'mitāyur nāmocyate |

「さようなことがらをば、また、何ごとにと、ご認可できたまわさるや。輿台が縱嗣たる方よ。すなわち、何ごととしてはおろうはずの、作用によってか、これまた、さような合塵能のことにあそばれざるべからざりける御方も、また、祉寿の量測せられずにおる仁事、 すなわち、名義そのことにと、 これまた、勘弁せられおかさるのでありましょうや。

tasya khalu punaḥ śāri-putra tathāg=atasya teṣāṃ ca manuṣyāṇām aparimitam āyuḥ pramāṇam | tena kāraṇena sa tathāgato 'mitāyur nāmocyate |

ところが、かたや、さような御方ご一身のなるべきはずとはおわしまさねばならぬところにもおかれんばかりのではありますが、乗輿后体が嗣嫡たる方よ、また、来同者ご自身、 すなわち、 さような、諸々の、人品魂らとしておらざるべからざりけるおおみものごとどものならまほしともつこうまつろうばかりとてあるであろうところのではありまするけれども、 これまた、量了せずにはいるきわの、 命分そのことも、また、定格そのことのことであったはずでなければなりませぬ。すなわち、さような験功としておらざるべからざりけるものごとによって、 これまた、 さような同塵能のことにあられざるべからざりける御方が、また、寿命が計測されずにある仁事そのこと、すなわち、名位そのことにと、理弁されおかれるのであります。

tasya ca śāri-putra tathāgatasya daśa kalpā anuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbuddhasya ||8||

それはともかく、輿台が正嫡たる方よ、これまた、征合者ご一身のならまほしとはあらねばならぬばかりにもあろうところの、 また、 十科どもが、すなわち、諸々の、代数たち一身らとしてでこそはあるが、これまた、未世上たりけりともおったばかり

とはいるきわの、方正悔悟体そのものに対しても、 また、 これ、覚潤なりあそばせておわせる御方のなりけりとまかりあったばかりにあろうはずでなければなりますまい。」

<八>

tat kiṃ manyase śāri-putra kena kāraṇena sa tathāgato Smitābho nāmocyate |

「さようなものごとにと、すなわち、何ごとをば、負認されおかさるや。乗輿后体が繼嗣たる方よ。 これまた、誰のことにはあろうはずの、作用によってか、 さような合塵能としてあらせざるべからざりける御方も、また、実現なるにたる者の裁量せずにいる仁者、すなわち、名分にと、勘弁せられたまわさるのでありましょうや。

tasya khalu punaḥ śāri-putra tathāg=atasyābhā apratihatā sarva-buddha-kṣetreṣu |

ところで、こなた、さようなおおみものごとそのことのことにはあそばりょうはずの、これまた、輿台が嗣嫡なる方よ、来同者ご一身のたるべしともおらねばなるまいきわの、現実境そのものが、また、拮抗せずにおるのでなければなりませぬ。すなわち、これ、諸々の、誰もかれもらの覚現せられておる田野どもそのことに於てつこうまつらんばかりなりけりとはあったところでもなければありませぬ。

tena kāraṇena sa tathāgato Smitābho nāmocyate |

さような験功としておらざるべからざりけることがらによって、これまた、さような同塵能のことにおわさざるべからざりける御方が、 また、 体現はたすにたる者が計量せられずにある仁者自身、すなわち、名目そのことにとこそ、理弁されおかさるのであります。

tasya ca śāri-putra tathāgatasyāpra=meyaḥ śrāvaka-saṃgho yeṣāṃ na su-karaṃ

pramāṇam ākhyātuṃ śuddhānām arhatām |

それはともかく、これまた、乗輿后体が正嫡たる方よ、また、征合者ご一身のなりしはずとはあろうところにもありましょうばかりの、すなわち、料簡せられずにすむとはおらんきわにもいるではあろうばかりの、これまた、令名者らという社会自身も、また、諸々の、およそ、自らの、高次に自験なるにたるべききわにとはおるであろう、料予に取り、上称するのが済然なっているわけでもなかりけむおおみものごとどものたるべけんと、すなわち、諸々の、応鑑能がたご一身らのならまほしとはつこうまつろうばかりとてあらんはずでもなければありませぬ。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-guṇa-vyūhaiḥ samalaṃkṛtaṃ tad buddha-kṣetram ||9||

このように、諸々の、型色どもそのことによってでは、輿台が繼嗣たる方よ、これまた、諸々の、才覚者らという本邑が性質なりけらし当態たち自身によってでも、また、調整せられておるきわとはまかりおらねばならなかったほどにともいるのが、すなわち、さような邑邦が理覚されてある仁事としておらざるべからざりけることがらになければなりませぬ。」 <九>

punar aparaṃ śāri-putra ye amitāyuṣā tathāgatasya buddha-kṣetre sattvā upapannāḥ śuddhā bodhi-sattvā avini=vartanīyā eka-jāti-pratibaddhās teṣāṃ śāri-putra bodhi-sattvānāṃ na su-karaṃ pramāṇam ākhyātum anyatrāprameyāsaṃ=khyeyā iti saṃkhyāṃ gacchanti |

「ところが、更に、乗輿后体が嗣嫡たる方よ、諸々の、およそ、祉寿の量測せられずにおる仁事、すなわち、合塵能のなりとてあるべき、覚存能という本田に於て、紀本魄らのことにあらざるべからざりけむ者たちが、これまた、恩宥せられてはあるにもなければありませぬ。

寅済せられてはあそばれるところの、諸々の、理性が存誠能たりけらしともおかせ

ん御方がたは、これ、逸怠せられざるを要すべからんともおわしますが、また、諸々の、一箇が得生体なりけらし者らの契約なってはいるきわたるべしともあらせらりょうばかりの、すなわち、諸々の、さような、自らの、これまた、輿台が正嫡なりける御方よ、覚然体という位本霊たちのたりけれとはおるべかりしも、また、高度に、これ、験為はたすにたるべくはおろうばかりともいましょうきわの、定量に対して、云称たまわさるのが別途にとこれおかせるわけではない御方がたが、また、『予測されずにすむものごとどもによるとも称挙せられずにはすむほどなりともかたじけのうせんほどとてあそばす。』というふうにこそ、すなわち、全称境そのものに取り、討通ありたまわすわけであります。

tatra khalu punaḥ śāri-putra buddha-kṣetre sattvaiḥ praṇidhānaṃ kartavy=am | tat kasmād dhetoḥ yatra hi nāma tathā rūpaiḥ sat-puruṣaiḥ saha samavadhānaṃ bhavati |

ところで、かたや、そのつど、乗輿后体が継嗣たる方よ、田野の覚然なっている仁事そのことに於ては、これまた、諸々の、切誠魄たちによっても、また、委遵そのことが、すなわち、為験せられねばならぬにはありますが、さようなことがらそのことが、これまた、誰としてもおらんきわの、当格の方からあずかりあるわけでありましょうや。すべからく、名義そのことは、同然、諸々の、肖像そのことどもによってこそまかりおらんほどにといるわけですから、諸々の、実存ならまほしけるものごとどもという賓客たち一身らによっても、また、倶然に、合託そのことが、存続これあるわけであります。

nāvara-mātra-keṇa śāri-putra kuśala-mūlenāmitāyuṣas tathāgatasya buddha-kṣetre sattvā upapadyante |

すなわち、諸縁恩らが自己自体たりけらしとはおろうわけでもないままのではありますが、輿台が嗣嫡なる方よ、これまた、健全裡たりけらし本根そのことによって、また、命分が計測されずにある仁事そのこと、すなわち、来同者ご自身のなるべから

んとこそ、 これまた、英覚者らという本邑そのことに於て、 また、諸々の、紀本魂がたご一身らも、すなわち、これ、寄裕はたされますわけであります。

yaḥ kaś cic dhāri-putra kula-putro vā kula-duhitā vā tasya bhagavato Śmit=āyuṣas tathāgatasya nāma-dheyaṃ śroṣyati śrutvā ca manasi-kariṣyati eka-rātraṃ vā dvi-rātraṃ vā tri-rātraṃ vā catū-rātraṃ vā pañca-rātraṃ vā ṣaḍ-rātraṃ vā sapta-rātraṃ vā vikṣipta-citto manasi-kariṣyati |

これまた、およそ、誰か、乗輿后体が正嫡たりける御方よ、あるいは、世代が継嗣なりけれともおかれるか、 あるいは、 累代という滋乳后体のことにもあるであろう公達が、また、さような浩然者としておらざるべからざりけるおおみことがら、すなわち、寿命の裁量せずにいる仁事そのことのことにはおわしょうともおかれんところの、それ、同塵能ご自身のたらまほしかれとこそ、これまた、名位により託存せられざるをえぬところとてはいます御方に対して、信聞ありもうすやもしれませぬ。

また、聞得つかまつってではありまするけれども、すなわち、心思これなることでありましょう。あるいは、一夜毎にも、あるいは、二連夜でも、これまた、あるいは、三夜毎にも、あるいは、四連夜でも、あるいは、五夜毎にも、あるいは、六連夜でも、あるいは、七夜毎にも、 また、 志識なっておる者の委積なっている仁者一身として、心得これありもうすやはしれませぬ。

yadā sa kula-putro vā kula-duhitā vā kālaṃ kariṣyati tasya kālaṃ kurvataḥ so Śmitāyus tathāgataḥ śrāvaka-saṃ=gha-parivṛto bodhi-sattva-gaṇa-puras-kṛtaḥ pura-taḥ sthāsyati |

あらかじめ、さような、あるいは、世系が嗣嫡なるとてもいますところか、あるいは、世代という乳養后体のことでもあったところに、これ、おかざるべからざりける

者が、すなわち、時節自身に取って、自作ありもうすことでありましょうが、さような、時勢に対し、自験なりつつおらざるべからざりけるおおみものごとのたるべけんには、これまた、さような祉寿が計量せられずにある仁事としてあらせざるべからざりける御方のことにもあそばりょうところの、また、征合者ご一身、すなわち、諸令聞能という倫社らの周旋なりもうしてはおわせる御方こそが、これまた、知性が存誠能なりけらし諸理数らの遜譲これなってもあらせる御方として、また、故塁の上から、すなわち、介立あそばせたまうやはしれませぬ。

so ʃviparyasta-cittaḥ kālaṃ kariṣyati ca | sa kālaṃ kṛtvā tasyaivāmitāyuṣas tathāgatasya buddha-kṣetre sukhāvaty=āṃ loka-dhātāv upapatsyate |

これまた、さような迷横せずにいることがらどもが心神たらざるべからざりける御方も、また、時局自身に取り、ご自験なりたまわすことではあろうけれどもであります。すなわち、さような御方ご一身が、これまた、時運自身にと、験為はたされましてや、また、さような命分の量測せられずにおる仁事としておわせざるべからざりける御方のことにはわたらりょうはずともあられましょうところの、合塵能ご一身のならまほしけれとこそ、邑邦が自覚せられてある仁事そのこと、すなわち、易安という近習府そのものとしてはおったはずの、これまた、俗塵という脈理ご自身に於て、また、扶宥できあそばすやもしれませぬ。

tasmāt tarhi śāri-putra idam artha-vaśaṃ saṃpaśyamāna eva vadāmi |

はたせるかな、輿台が正嫡たる方よ、すなわち、かような諸準位が格致ならざるべからざりけらしおおみものごとに対してこそ、これまた、上剰せられながらではあるにもほかなりませぬが、また、直諭これもうしあげんのみであります。

sat-kṛtya kula-putreṇa vā kula-duhitrā vā tatra buddha-kṣetre citta-praṇi=dhānaṃ kartavyam ||10||

すなわち、実正化これなってのち、あるいは、累代という継嗣一身によっても、あるいは、 世系という滋乳后体そのものによってでも、 そのつど、覚在能という本田そのことに於てでは、これまた、遵託が意識せられてある仁事そのことが、また、為作されねばならぬところとてあろうばかりにもなければありませぬ。」　<十>

tad yathāpi nāma śāri-putra aham etarhi tāṃ parikīrtayāmi

「当然、のみならず、 乗輿后体が嗣嫡たる方よ、 私自身は、 むしろ、 さような砌そのものに取って、宛然これもうさずもなるまいことにはなります。

evam eva śāri-putra pūrvasyāṃ diśi akṣobhyo nāma tathāgato meru-dhvajo nāma tathāgato mahā-merur nāma tath=āgato meru-prabhāso nāma tathāgato mañju-dhvajo nāma tathāgataḥ |

すなわち、こういうふうにもつかまつらんほどにとおりもうすきわにはほかなりませぬが、 輿台が正嫡なる方よ、 これまた、先故たりけりともおったばかりにはいるきわの、方陳境そのものに於てでも、また、無故能ご一身、すなわち、名分そのことのことにはいまさねばならぬところが、これまた、来同者ご自身におわしますばかりでなければなりませぬ。

また、 **ふしがはらやま山上** という標格一身、 すなわち、 名目そのこととしてもいませるのが、これまた、同塵能ご自身にはあられますところでもあり、また、**宏大なるふしがはらやま山系** 一身、 すなわち、名義そのことのことにはいますところが、これまた、征合者ご自身にあそばれますところでもあり、 また、 **ふしがはらやま山上** という絶景一身、すなわち、名位そのこととしてはいませるのが、 これまた、合塵能ご自身におわしますところでもあり、また、高雅たらまほし孤標一身、すなわち、名分そのことのことにはいますところが、これまた、来同者ご自身にあられるわけであります。

evaṃ pramukhāḥ śāri-putra pūrvasyāṃ diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā nirveṭhanaṃ kurvanti |

このように、諸々の、通額ならまほしけれともあそばれる御方がたが、また、乗輿后体が継嗣たる方よ、空前なりけれとはあろう場、すなわち、方今感そのものに於ても、これまた、**きつゆきがわ河系** という流衍感および流沙数が 近喩境たりしとこそわたらしょうばかりの、また、諸々の、覚現せられおかせておわせる御方がた、すなわち、諸々の、豁然者がたとしてあらせたわけでありますが、これまた、間隙のままなりけることがらどもが間暇たりしままなるとてはあろうはずの、諸々の、才覚者らという田野そのことどもをして、また、諸玩味圏という能機性そのことによって、すなわち、暗合せしめたまうや、 これまた、漸累そのことに対し、 また、ご自作ありたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ nāma dharma-paryāyam ||11||

すなわち、敢決ならんとあそばせるに、これまた、汝らこそがおわしまさねばならぬところでもありまするが、 また、 かような志念せられずにすむ者らという諸性能による宛然のことにあらざるべからざりけらしものごとが、 すなわち、 なにもかもどもが理覚されてある玄理一身に取っては、これまた、名目そのこととしてでも、また、格法という元理自身に対してまかりあったばかりとてなければならぬはずであります。」 <十一>

evaṃ dakṣiṇasyāṃ diśi candra-sūrya-pradīpo nāma tathāgato yaśaḥ-prabho nāma tathāgato mahārciḥ-skandho nāma tathāgato meru-pradīpo nāma tathāgato ʃnanta-vīryo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、こういうふうにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、怜悧たりけりともおったばかりにはいるきわの、方計対そのものに於てでも、また、月精が神粋性なる光源一身、すなわち、名義そのことのことにはいますところが、これまた、同塵能ご自身にあられたまうはずでなければなりませぬ。また、万有という暁景一身、すなわち、名位そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、征合者ご自身にはあそばれますところでもあり、また、大常的気焔という体幹一身、すなわち、名分そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、合塵能ご自身におわしますところでもあり、また、**ふしがはらやま山系**という熱源一身、すなわち、名目そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、来同者ご自身にあられますところでもあり、また、非限極たりけらし勇決能一身、すなわち、名義そのことのことにはいますところも、これまた、同塵能ご自身にはあそばれるはずでもあります。

ẹvaṃ pramukhāḥ śāri-putra dakṣiṇasyāṃ diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā nirveṭhanaṃ kurvanti |

このように、諸々の、定額能がたご一身らが、また、輿台が嗣嫡なる方よ、順直たらまほしかれとはおろう廷、すなわち、方陳境そのものに於ても、これまた、**きつゆきがわ河畔**という沿流境および堆沙洲が隠喩圏なるべきとこそわたらりょうばかりの、また、諸々の、覚存能がたご自身、すなわち、諸々の、歴然者がたとしておわせるであろうわけですが、これまた、空隙のままたりけることがらどもが閑暇なりきままたるにとはおろうはずの、諸々の、本邑の覚然なっている仁事どもそのことをして、また、嘗味権という能幹性そのことによって、すなわち、幽合せしめたまい、これまた、推漸そのことに取って、また、ご自験なりたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ nāma dharma-paryāyam ||12||

すなわち、敢対あらんとおかせるに、これまた、汝らこそがあられまさねばならぬところでもありまするが、また、かような意念されずにすむ者らという諸性度による符応のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、誰もかれもが英覚者なりけらし哲理一身に対しては、これまた、名位そのこととしても、また、諸覇気という真理自身に取ってまかりあるばかりとてなければなりますまい。」

<十二>

evaṃ paścimāyāṃ diśi amitāyur nāma tathāgato 'mita-skandho nāma tathāgato 'mita-dhvajo nāma tathāgato mahā-prabho nāma tathāgato mahā-ratna-ketur nāma tathāgataḥ śuddha-raśmi-prabho nāma tathāgataḥ |

「すなわち、こういうふうにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、絶後たらまほしかれともおろうきわにはおらんばかりの、方今感そのものに於てでも、また、寿命が計測されずにある仁事そのこと、すなわち、名分そのことのことにいましょうはずではあるところが、これまた、征合者ご一身にあそばすのでなければなりませぬ。

また、躯骸の裁量せずにいる仁者自身、すなわち、名目そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、合塵能ご一身にはおわすのでもあり、また、標格が計量せられずにある仁者自身、すなわち、名義そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、来同者ご一身にあらせたまうのでもあり、また、博大なるおおみことがらという清曙自身、すなわち、名位そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、同塵能ご一身にあそばすのでもあり、また、甚大たる者らによる給施という幣帛自身、すなわち、名分そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、征合者ご一身におわすのでもあり、また、済払せられておるものごとどもが諸光景なる暁明自身、すなわち、名目そのこととしてはいませるのも、これまた、合塵能ご一身にあらせるはずではあります。

evaṃ pramukhāḥ śāri-putra paścimāyāṃ

diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā nirveṭhanaṃ kurvanti |

このように、諸々の、口上たらまほしかれともあそばせる御方がたが、また、乗輿后体が正嫡なる方よ、予後たりけれとはおろう砌、すなわち、方計対そのものに於ても、これまた、**きつゆきがわ河系**という流衍感および流沙数が近喩境なりきとこそわたらりょうばかりの、また、諸々の、自覚せられおかれておわさる御方がた、すなわち、諸々の、欣然者がたのことにあられたわけでありますが、これまた、間隙のままたりけることがらどもが間暇なりきままたるにとはおろうはずの、諸々の、覚在能という邑邦そのことどもをして、また、諸覚味態という能才性そのことによって、すなわち、暗合せしめたもうてのち、これまた、漸累そのことに対し、また、ご自作ありたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ nāma dharma-paryāyam ||13||

すなわち、敢決ならんとおかせるに、これまた、汝らとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましょうが、また、かような志念せられずにすむ者らという諸性情による宛標のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかもの覚現せられておる実理自身に取っては、これまた、名義そのこととしてでも、また、律法という原理一身に対してまかりおらんほどにとなければならぬはずであります。」

<十三>

evam uttarāyāṃ diśi mahārciḥ-skandho nāma tathāgato vaiśvānara-nirghoṣo nāma tathāgato dundubhi-svara-nirghoṣo nāma tathāgato duṣpradharṣo nāma tathāgataḥ ditya-saṃbhavo nāma tath=āgato jale niprabho nāma tathāgataḥ prabhākaro nāma tathāgataḥ |

「すなわち、こういうふうにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、世上ならまほしけれともあろうところにはあらんばかりの、方陳境そのものに於てでも、また、大尋的英気という象幹自身、すなわち、名位そのことのことにいましょうはずではあるところが、これまた、来同者ご一身におわすのでなければなりませぬ。

また、汎民庶的余韻自身、すなわち、名分そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、同塵能ご一身にはあらせたまうのでもあり、また、鼓性が音調たる残響自身、すなわち、名目そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、征合者ご一身にあそばすのでもあり、また、低次ならまほし武運自身、すなわち、名義そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、合塵能ご一身におわすのでもあり、また、日当たりけらし稟質自身、すなわち、名位そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、来同者ご一身にあらせたまうのでもあり、また、両水明ともそのこととしてはこれおらんはずともいるきわの、光芒自身、すなわち、名分そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、同塵能ご一身にあそばすのでもあり、また、払曙という絶品自身、すなわち、名目そのこととしてはいませるのも、これまた、征合者ご一身にはおわせるはずでもあります。

evaṃ pramukhāḥ śāri-putra uttarāyāṃ diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā nirveṭhanaṃ kurvanti |

このように、諸々の、口径霊がたご自身が、また、輿台が継嗣なる方よ、利上たらまほしかれとはおろう場、すなわち、方今感そのものに於ても、これまた、きつゆきがわ河畔という沿流境および堆沙洲が隠喩圏なるべきとこそわたらりょうばかりの、また、諸々の、才覚者がたご一身ら、すなわち、諸々の、浩然者がたのことにあられるであろうわけですが、これまた、空隙のままたりけることがらどもが閑暇なりきままたるにとはおろうはずの、諸々の、本田が理覚されてある仁事そのことどもをして、また、玩味圏という能官性そのことによって、すなわち、幽合せしめたまうや、これまた、推漸そのことに取り、また、ご自験なりたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ nāma dharma-paryāyam ||14||

すなわち、敢対あらんとおかせるに、これまた、汝らとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましょうが、また、かような意念されずにすむ者らという諸性質による符験のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、誰もかれもらが覚存能なりけらし学理自身に対しては、これまた、名義そのこととしてでも、また、諸法律という公理一身に取ってまかりおらんほどにとなければならぬはずであります。」

<十四>

evam adhastāyāṃ diśi siṃho nāma tathāgato yaśo nāma tathāgato yaśaḥ-prabhāso nāma tathāgato dharmo nāma tathāgato dharma-dharo nāma tathāgato dharma-dhvajo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、こういうふうにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、元下たりけりともおったばかりにはいるきわの、方計対そのものに於てでも、また、厳獅霊自身、すなわち、名位そのことのことにいましたはずではあるところが、これまた、合塵能ご一身におわすのでなければなりませぬ。

また、万象そのこと、すなわち、名分そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、来同者ご自身にはあられますところでもあり、また、景気という遠景一身、すなわち、名目そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、同塵能ご自身にあそばれますところでもあり、また、法理能一身、すなわち、名義そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、征合者ご自身におわしますところでもあり、また、理法の喩負これなるにたりませる君公ご一身、すなわち、名位そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、合塵能ご自身にあられたまうのでもあり、また、理気という孤標一身、すなわち、名分そのこととしてはいませるのも、これまた、来同者ご自身にはあそばれるはずでもあります。

evaṃ pramukhāḥ śāri-putra adhastāyāṃ diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā nirveṭhanaṃ kurvanti |

このように、諸々の、通額ならまほしけりとはおわさる御方がたも、また、乗輿后体が嗣嫡たる方よ、次下なりけれとはあろう廷、すなわち、方陳境そのものに於ても、これまた、きつゆきがわ河系という流衍感および流沙数が近喩境たりしとこそわたらしょうばかりの、また、諸々の、覚然なりたもうてあらせる御方がた、すなわち、諸々の、豁然者がたのことにあそばれたはずであるわけですが、これまた、間隙のままなりけることがらどもが間暇たりしままなるとてはあろうはずの、諸々の、英覚者らという田野そのことどもをして、また、諸嘗味権という能機性そのことによって、すなわち、暗合せしめたまい、これまた、漸累そのことに対し、また、ご自作ありたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ nāma dharma-paryāyam ||15||

すなわち、敢決ならんとおかせるに、これまた、汝らとしておわせねばならぬきわにもあるはずですが、また、かような志念せられずにすむ者らという諸性能による宛然のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかもどもが自覚せられてある玄理一身に取っては、これまた、名目そのこととしてでも、また、憲法という元理自身に対してまかりあるばかりとてなければならぬはずであります。」

<十五>

evam uparisṭhāyāṃ diśi brahma-ghoṣo nāma tathāgato nakṣatra-rājo nāma tathāgata indra-ketu-dhvaja-rājo nāma tathāgato gandhottamo nāma tathāgato gandha-prabhāso nāma tathāgato mahārci-

skandho nāma tathāgato ratna-kusuma-sampuṣpita-gātro nāma tathāgataḥ sāl=endra-rājo nāma tathāgato ratnotpala-śrīr nāma tathāgataḥ sarvārtha-darśī nāma tathāgataḥ sumeru-kalpo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、こういうふうにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、科上たるべしともおらんきわにはいましょうばかりの、方今感そのものに於てでも、また、霊沢という鳴韻一身、すなわち、名義そのことのことにはいますところが、これまた、同塵能ご自身にあられたまうはずでなければなりませぬ。

また、天紀という王道一身、すなわち、名位そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、征合者ご自身にはあそばれますところでもあり、また、機能という諸鑑札が標格なる憲王一身、すなわち、名分そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、合塵能ご自身におわしますところでもあり、また、諸気味という優上能一身、すなわち、名目そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、来同者ご自身にあられたまうところでもあり、また、余臭という絶景一身、すなわち、名義そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、同塵能ご自身にあそばれますところでもあり、また、大常的気尚という形骸一身、すなわち、名位そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、征合者ご自身におわしますところでもあり、また、諸恩恵という華美が庶繁せしめられてある渾身能一身、すなわち、名分そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、合塵能ご自身にあられたまうところでもあり、また、峭塁が幹能たる覇道一身、すなわち、名目そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、来同者ご自身にあそばれますところでもあり、また、諸恵施が寧温なる適嫡感そのもの、すなわち、名義そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、同塵能ご一身におわせるのでもあり、また、誰もかれもという平方をして見在せしめうるにたりませる君公ご自身、すなわち、名位そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、征合者ご一身にあらせたまうのでもあり、また、**たかふしはらやま**山上という当料自身、すなわち、名分そのことのことにはいますところも、これまた、合塵能ご一身にはあそばせるはずでもあります。

evaṃ pramukhāḥ śāri-putra uparisṭhāyāṃ diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā bhag=avantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā nirveṭh=anaṃ kurvanti |

このように、諸々の、定額魄がたご自身が、また、輿台が正嫡たる方よ、直上なるべけれとはあろう砌、すなわち、方計対そのものに於てでも、これまた、**きつゆきがわ河畔**という沿流境および堆沙洲が隠喩圏たるべしとこそわたらしょうばかりの、また、諸々の、覚在能がたご一身らとしてこれおわせんきわの、すなわち、諸々の、歴然者がたのことにあられるであろうわけですが、これまた、空隙のままなりけることがらどもが閑暇たりしままなるとてはあろうはずの、諸々の、本邑の覚現せられておる仁事どもそのことをして、また、覚味態という能幹性そのことによって、すなわち、幽合せしめあらせられてのち、これまた、推漸そのことに取って、また、ご自験なりたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ nāma dharma-paryāyam ||16||

すなわち、敢対あらんとおかせるに、これまた、汝らとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましょうが、また、かような意念されずにすむ者らという諸性度による符応のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかもが才覚者たりけらし哲理自身に対しては、これまた、名目そのこととしても、また、諸格法という真理一身に取ってまかりおらんほどにとなければなりますまい。」

<十六>

tat kiṃ manyase śāri-putra kena kāraṇenāyaṃ dharma-paryāyaḥ sarva-buddha-parigraho nāmocyate

「さようなことがらが、すなわち、何ごとにと、ご認許できたまわれるや。乗輿后体が継嗣なる方よ。これまた、何ごとのことにはあろうところの、作用そのことによっ

てか、また、かような覇気が原理たらざるべからざりけらし者、すなわち、誰もかれもらが理覚されてある実理自身が、これまた、名義そのこととして、勘弁せられるのでありましょうや。

ye ke cic chāri-putra kula-putrā vā kula-duhitaro vāsya dharma-paryāyasya nāma-dheyaṃ śroṣyanti

およそ、誰でも、輿台が嗣嫡なりける御方よ、あるいは、世代が正嫡たりけれともおかせるか、あるいは、累代という乳養后体としてもおるであろう公達がたが、また、かような律法という公理のことにおわさざるべからざりけらし御方こそのなるべからんとて、すなわち、名位により託嘱されざるをえぬおおみものごとに対してこそ、これまた、嘉聞なりませることでありましょう。

teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ nāma-dheyaṃ dhārayiṣyanti sarve te buddha-parigṛhītā bhaviṣyanti avinivartanīyāś ca bhaviṣyanti anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau |

それはともかく、また、諸々の、覚存能がた、すなわち、諸々の、欣然者がたのたらまほしかれと、これまた、名分により託存せられざるをえぬおおみことがらをして、任喩せしめこれならせるやはしれぬにもありましょうが、また、諸々の、なにもかもどもとしてこそ、すなわち、さような、諸々の、典掌しておる者の覚然なっている仁者らのことにわたられざるべからざりける御方がたとしてこそ、ご存立なりあそばすことではありましょう。これまた、諸々の、解怠されざるを要すべからんともおかれる御方がたのこととてあられたまうわけではあるけれどもであります。また、ご存続ありたまわすやはしれぬにもありますが、これ、非実利なりけらしとてあらん場、すなわち、正格共悟体そのものに於てこそはまかりわたらせたまうきわにともなければありませぬ。

tasmāt tarhi śāri-putra śrad[dh]ādhvaṃ

pratīyatha mā kāṅkṣayatha mama ca teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatām |

はたせるかな、乗輿后体が繼嗣たる方よ、諸信愛境という方程一身に取って、条決なられこそはたまい、私自身をしても、これまた、仰望せしめたまわすではないか。また、私一身のならまほしけれともかたじけのうせんところとてあそばれるはずではありましょうけれども、それはともかく、諸々の、英覚者がた、すなわち、諸々の、浩然者がたのたるべけれとこれまかりおかせんばかりともなければありますまい。

ye ke cic chāri-putra kula-putrā vā kula-duhitaro vā tasya bhagavato 'mitāyuṣas tathāgatasya buddha-kṣetre citta-praṇidhānaṃ karisyanti kṛtaṃ vā kurvanti vā sarve te 'vinivartanīyā bhaviṣyanty anuttarāyāṃ samyak-saṃ=bodhau |

これまた、およそ、誰か、輿台が嗣嫡なりける御方よ、あるいは、世系が正嫡たりけれともおかせるか、あるいは、世代という滋乳后体としてもおるであろう公達がたが、また、さような豁然者のことにおわさざるべからざりける御方としてはあらせられるきわにともいましょうばかりの、すなわち、祉寿が量測せられずにおる仁事のことにはあられますところの、これまた、来同者こそのなるべからんとて、また、邑邦が自覚せられてある仁事そのことに於て、すなわち、心識による委遵そのことに対して、自作これありませることでもありましょう。

これまた、あるいは、自験なっているおおみものごとに取ってあそばせるきわにともおかせねばならぬか、あるいは、ご自験これなりもおわさんに、また、諸々の、誰もかれもたち、すなわち、さような、諸々の、逸怠されざるを要すべからんとあられざるべからざりける御方がたとしてあそばせるかでなければなりますまい。これまた、ご存立たまわさるやはしれぬにもありますが、また、無世故ならまほしけれとはあらねばならぬところの、すなわち、方正統悟体そのものにこそ於てかたじけのうわたられんばかりとておわしましょうところでなければなりますまいぞ。

tatra ca buddha-kṣetra upapatsyanti upapannā vā upapadyanti vā |

これまた、そのつどともまかりおかせられましょうほどにとではありまするけれども、また、覚在能らという本田そのことに於て、すなわち、賛佑これできたまうことでありましょうが、これまた、あるいは、諸々の、恩宥せられおかれてもあられる御方がたのこととてはあそばれるところともあらねばならぬか、あるいは、また、嘉裕できこそたまわすかでなければなりますまい。

tasmāt tarhi śāri-putra śrāddhaiḥ kula-putraiḥ kula-duhitṛbhiś ca tatra buddha-kṣetre citta-praṇidhir utpāday=itavyaḥ ||17||

はたせるかな、乗輿后体が継嗣なる方よ、懇誠にともこれつこうまつらんほどにいましょうきわの、すなわち、諸々の、累代という嗣嫡たち自身によってでは、これまた、諸々の、世系という乳養后体そのものどもによってもまかりおらねばならぬばかりにとこそではありまするけれども、また、そのつど、すなわち、田野の覚現せられておる仁事そのことに於てでは、これまた、遵託体の知識せられておる仁境そのものも、また、出在せしめられるを要するべけんとおるのでなければなりませぬ。」

<十七>

tad yathāpi nāma śāri-putra aham etarhi teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatām evam acintya-guṇān parikīrtayāmi

「当然、のみならず、輿台が正嫡たる方よ、私一身としては、むしろ、さようなことがらどもそのことのことにもおわしますところの、諸々の、才覚者がた、すなわち、諸々の、歴然者がたのならまほしけれとこそ、これまた、こういうふうに、諸々の、志念せられずにすむ性情たち自身に対してではありますが、また、宛標たてまつらずもなるまいことにはなります。

evam eva śāri-putra mamāpi te buddhā bhagavanta evam acintya-guṇān pari=kīrtayanti |

すなわち、このようにつかまつらんほどにともおりもうさんきわにはほかなりませぬが、乗輿后体が継嗣たる方よ、これまた、私一身のならまほしともまかりあられたまわしょうばかりとてわたられんところではあっても、また、さような、諸々の、理覚されあそばれておわさる方がたとしてあらせざるべからざりける御方がた、すなわち、諸々の、欣然者がたは、これまた、こういうふうに、また、諸々の、意念されずにすむ性質たちに取り、すなわち、宛然あそばせおかすわけであります。

su-duṣ-karaṃ bhagavatā śākya-muninā śākyādhirājena kṛtam |

これまた、高度たらまほし者らの低度に自作あるにたるきわにともおらんものごとが、また、浩然者、すなわち、機巧能が預定者なりけらしとはおわさん御方のことにもあられねばならぬところにはおかれるばかりの、これまた、機動性という御王沢によっても、また、為験せられてあるところとてなければなりませぬ。

sahāyāṃ loka-dhātāv anuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbudhya sarva-loka-vipratyayanīyo dharmo deśitaḥ kalpa-kaṣāye sattva-kaṣāye dṛṣṭi-kaṣāya āyuṣ-kaṣāye kleśa-kaṣāye ||18||

すなわち、許容圏そのものとしてはおったはずの、これまた、世塵という理脈ご自身に於て、また、不営利たらまほしともいる廷、すなわち、正格協悟体そのものに対し、覚潤これなりたまわすや、これまた、なにもかもという俗世らの挺特せられるを要するべけんとはいませるきわの、法律魄ご一身が、また、これ、趨向せしめられておられるところにあるわけであります。

すなわち、諸関数という険渋性そのことに於てでもかたじけのうたまわれんばかりとはいまさねばならなかったところでもあるが、これまた、諸位本霊という渋滓自身に於てではあそばれますところでもあり、また、正視性という難渋性そのこと、すな

わち、諸命分という渋役一身に於ておわしたのでなければならぬが、これまた、宿恨という険渋性そのことに於てではまかりあられますばかりとてもおかれましょうぞ。」

<十八>

tan mamāpi śāri-putra parama-duṣ-karaṃ yan mayā sahāyāṃ loka-dhātāv anuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbudhya sarva-loka-vipratyayanīyo dharmo deśitaḥ sattva-kaṣāye dṛṣṭi-kaṣāye kleśa-kaṣāya āyuṣ-kaṣāye kalpa-kaṣāye ||19||

「また、さようなことがらそのことが、すなわち、私自身のなりけりとはかたじけのうせんばかりとてもあったところではありましても、これまた、輿台が嗣嫡たる方よ、究極ならまほし者らが低次に作為なすにたるところにはおらねばなりませぬのも、また、およそ私によってこれつかまつらざるべからざりけむものごとになければなりますまい。

すなわち、耐忍権そのもののことではあるところの、これまた、俗塵という素脈一身に於て、また、未世上たるにともおらんきわの、すなわち、方正悔悟体そのものにと、これ、悟潤はたしましてこそ、これまた、誰もかれもらという世塵が践次されるを要すべからんとはいましょうところの、法理能自身も、また、指向せしめられてはあるところでもなければありませぬ。

すなわち、切誠魄という渋滓一身に於てこれつかまつらんほどとはおらねばならぬきわにともいるが、これまた、諸直視性という難渋性そのことに於てではあらんところでもあり、また、諸愁怨という渋役自身、すなわち、寿命という険渋性そのことに於ておるのではありますが、これまた、抵質という渋滓一身に於てまかりおりもうさんほどにとこそなければなりますまいぞ。」

<十九>

idam avocad bhagavān āttamanāḥ āyuṣmān [s]āri-putras te ca bhikṣavas te ca bodhi-

sattvāḥ sa-deva-mānuṣāsura-gandharvaś ca
loko bhagavato bhāṣitam abhyanandan ||20||

かようなことがらそのことに取って、また、弁証これあそばせておわしたのも、豁然者にはあられました。

知的にともこれまかりいませるばかりの、寿完能、すなわち、乗輿后体という御正嫡ご自身［サーリプトラ］が。それはともかく、これまた、諸々の、守節者たち一身らも、また。それはともかく、諸々の、自覚体という紀本魂たち自身こそが、すなわち、過半精霊なりけらし諸人理という非神格が幽調たるべしともおらんきわのではあるけれども、これまた、俗世として、また、これ、歴然者の方からかたじけのういたさんばかりとて、すなわち、自叙なりたもうてあそばせる御方に対し、これまた、ご親好もうしあげましたことではあった。

<二十>

sukhāvatī vyūho nāma
mahā-yāna-sūtram ||

**また、安閑という近圏府そのもののことでもあるところの、**
**特態一身、すなわち、名目そのこと**
**としてはおらねばならぬのも、これまた、**
**絶大ならまほしけるものごとどもによる巡運**
**（㊀ 大尋的巡運　㊁ 大巡運）**
**という歴史そのことであるところでなければならぬ。**

以上、南都小塔院住職河村俊英訳、梵本阿弥陀経、直訳語編、終。